

鴻 koh

月刊俳句誌

令和5年8月1日発行
(毎月1回1日発行)
第18巻第8号 通巻206号

8 月号

2023



園

師恩ふと泰山木の花の雨

草蜉蝣足許に日の暮れ残る

忙中に閑あり額の花の白

帝釈天たつぷりと夏来てゐたり

木彫の釈迦の生涯日雀鳴く

雲駈けよ大山蓮華咲く寺に

梅雨の隙飴切の音を空耳に

遠きことふと梅檀の花の下

弾き猿弾き卵の花腐しかな

鶉が一羽満潮どきの濔標

日傘畳もか草原に座らうか

いま生れし蜻蛉にある静けさよ

雨季の橋遊行の僧と渡りけり

師恩ふと

主宰作品

増成栗人

額の花

副主宰作品

谷口摩耶

青梅雨に木製のドア膨らみぬ

雨の昼黄をゆるめたる未央柳

絵の好きな母の好みし額の花

サルビアの彩る街の交差点

リハビリの散歩帰りや栃の花

旧道の川のほとりの花葵

夏至の日やパスタの店の組み合わせる

江戸川の鉄橋が見え鴨足草

夏の夕齒科に予約を入れにけり

健やかな余生のためのビールかな

私はもともとお酒に弱いので、七十代半ばになって、ビールの句を詠むとは、思ってもみませんでした。今も沢山飲むことはできませんが、少しずつ慣れてきて、夫と二人で楽しく晩酌が出来るようになり、幸せを感じています。幾つもの病を克服しながら、ここまで生きて来られたことに毎日感謝しています。一日の終わりのビールは健康のパロメーターかもしれません。

俳 作品抄

会員選

さりさりと抹茶小豆のかき氷
美容師の鋏の音のすずしさよ
カーネーション尺の物差し飴色に
おむすびをほほぼる子等よ青楓
なだらかななんぼんの花畑かな

綾戸五十枝
高橋 詩
野村昌代
西山二三子
原 光生

谷口摩耶 選

同人選

囀りや森が童話の国となる
鷗外の愛せしジョッキ南吹く
さくらさくら夢のつづきもまたさくら
朔太郎忌森より蝶の付いて来る
ぼうたんの風に快樂のありにけり
葉の裏のまひまひつぶり旅なかば
語らひのベンチの二人つばくらめ
薔薇園の風にも色のあるやうな
ほたるの夜一と日延ばしのこと多し
夏の雨窯休ませてゐたりけめ
野に出でよ修司の五月来たりけり

水沢和世
田邑利宏
鈴木隆一郎
神野未友紀
五十嵐敏子
横尾かな
伊藤真代
花本智美
坂入喜代枝
待場陶火
相州 健

増成栗人 選

山彦集

増成栗人 選



岡崎 神野未友紀

朔太郎忌森より蝶の付いて来る
親と子と鳴らす鐘の音青岬
まつさらな竹箒立て五月来る
街青葉スタバで開く新刊書

卯の花の庭の木椅子に眠り込む
茅花流し路面電車のブレイキ音

流山 田邑利宏

ゆつくりとゆく薫風の団子坂
観潮楼青葉越しなる風がくる
鷗外の愛せしジョッキ南吹く
柏手が根津の五月の音となる
落し文乙女稲荷に詣で来て
森陰の白き木の花聖五月

会津 鈴木隆一郎

さくらさくら夢のつづきもまたさくら
花篝山鹿素行の碑を照らす
ねんごろに松の芯摘む翁かな
盆栽の雪たちまちに消えて春
料峭や手動で開ける汽車のドア
鶯の声交はし合ふ只見峡

柏 井上つぐみ

真筆の芭蕉の句碑へ桜東風
黄たんぽぽ今日は佳きことありさうな
葉桜や送迎バスの来る時刻
樟若葉東寺五重塔の黙
木斛の深閑として春の暮
のどけしやつるりと剥けし茹で玉子

我孫子 相川 健

野に出でよ修司の五月来たりけり
五月闇鹿島の森の要石
聖五月悔いといふ字に母おはす
粽解く笹のかをりのほんのりと
午後二時の緑蔭画架の置きどころ
恙なく生きておごらず蝸牛

横浜 花本智美

佐倉 横尾かな

母の背に傘傾けて青時雨
薔薇園の風にも色のあるやうな
ふつつりと伐られし薔薇に女優の名
新緑の窓開け放つレストラン
夕薄暑白きクロスに白き皿
青葉騒ずつと遅れて聞く訃報

豊橋 伊藤真代

豊川 水谷はや子

語らひのベンチの二人つばくらめ
若葉風野点の席へ人の列
ゴールデンウイーク明けの濃き珈琲
人待てりひとつばたこの花が散る
葛饅頭奈良井の宿に雨が降る
旅二日木曾路の枇杷の色つきぬ

英虞湾を眼下に朝のほととぎす
八十八夜存分に窓開け放つ
手作りの花押を蔵書に春惜しむ
越して来し隣家に小さき鯉のぼり
同窓の文芸講座虹立てり
上向きのカルテの数値松の芯



『ぼくはあと何回、満月を見るだろう』

坂本龍一・著 新潮社・刊

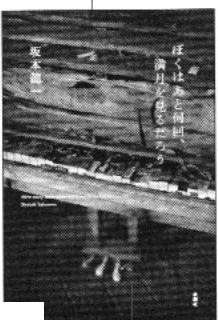
坂本龍一さんが今年三月二十八日に亡くなった。本書は、雑誌『新潮』に昨年からの今年初めにかけて連載された坂本さんの自伝『ぼくはあと何回、満月を見るだろう』を元としている。聞き書きというスタイルの連載だったので、聞き手の鈴木正文さんが追補を行なって一冊になった。

坂本さんは亡くなる直前まで、この自伝をはじめ、東日本大震災で被災した子どもや若者による東北ユースオーケストラの指導をしたり、自身の作品のレコーディングをしたり、創作活動を続けた。その張り詰めた生涯は、今後も多くの人々に感銘を与えるだろう。

僕は音楽評論家として坂本さんに何度も取材をさせていただいた。その際いつも緊張した。なぜなら坂本さんは鋭い感性を持つ「知の巨人」なので、こちらも精一杯の準備をして臨まなくてはならなかったからだ。しかし本書には坂本さ

んの気さくな側面や社会を思いやる言葉が随所に見られて、心安く読むことができた。活動拠点をニューヨークに移されて以降はお会いしていなかったのですが、坂本さんの晩年の詳細をこの本で知ることになった。

本書の扱う話題は多岐にわたる。坂本さんが興味を抱く対象は、音楽はもちろん、文学、美術、映画、哲学など芸術全般から原発や環境問題までが含まれ、その幅広さには驚かされる。この本の帯には「世界的音楽家、最後の言葉。」とある。坂本さんが世界的音楽家であることは周知の事実だが、同時に坂本さんは思索家として示唆に富む言葉を多く残した。



「かつては、人が生まれると周りの人は笑い、人が死ぬと周りの人は泣いたものだ。未来にはますます命と存在が軽んじられるだろう。命はますます操作の対象となろう。そんな世界を見ずに死ぬのは幸せなことだ。」

これは癌罹患以降の言葉で、「幸せなことだ」と言いながら、現代社会を憂う怒りにあふれている。原発や環境問題に対

する発言と地続きにある。一人の人間として生や死について語る言葉に、誰もが納得するのではないだろうか。

本書の大半は音楽についてのエピソードに割かれている。興味を惹かれたミュージシャンとは、その人が世界のどこにいても繋がろうとする。有名アーティストではなくとも、自分の共感する最先端の音楽家たちと躊躇なく交わる。最先端とはそういうものだが、この音楽では同じアイデアが世界同時多発的に生まれることが多い。まるでそのシンクロニシティ(共時性)の中心に坂本さんがいるかのようだ。

テレビ番組制作や整体などもカバーする坂本さんの旺盛な知識欲は呆れ返るほどだ。そうしたバラエティに富んだ話題に混じって、何と俳句に関する記述があった。尊敬する先輩でジャズピアニーストの山下洋輔さんのコンサートに招かれた坂本さんは、「HARKU」という曲を一緒に即興演奏することになった。「HARKU」は山下さんが作った曲で、5・7・5のリズムで交互に演奏するのがルール。

強い音でも弱い音でも、高い音でも低い音でも、とにかく5・7・5のリズムを守って演奏し、あらかじめ決められた合図で奏者が交代する。相手の演奏をちゃんと聴いていないとスムーズに交代できないという曲で、ある種、連歌などに通じる共同表現なのだろう。坂本さんはそれがフリージャズの本質だと語っている。俳句の側から見ると、この演奏ルールは俳句を披講する際のリズムと非常に似ているので、ぜひ俳人の方にyoutubeでこの曲を体験してみしてほしいと思う。

本書にある貪欲なまでの坂本さんの精神活動の痕跡は、読んでいて飽きない。そして読み終えかけた最終章に、驚きの発見があった。坂本さんは二〇一八年から二〇二二年までの四年間、『婦人画報』に「坂本図書」という連載をしていてこれをまとめて単行本化する計画があったという。亡くなる直前の三月八日にこの単行本のためのインタビューが行なわれ、坂本さんはここ数年、大切に読んできた十冊をリストアップしたのだった。その十冊には『意識と本質』(井筒俊彦)『行

入』(夏目漱石)、『日和下駄』(永井荷風)、『不合理ゆえに吾信す』(樋口雄高) などと並んで富澤赤黄男の第三合集『黙示』があった。

坂本さ癖はインタビュアーの鈴木さんに、赤黄男の代表句として第一句集『天の狼』収録の「蝶墜ちて 大音響の結氷期」を挙げ、絶賛したという。実は僕はこれまで、この句の良さがさっぱり分からなかった。しかし本書で坂本さんの音楽、あるいは音そのものへの飽くなき追求を知った後だったので、これまでとはまったく違った解釈がひらめいた。蝶は何を象徴しているのか。そしてこの句を読んだ坂本さんの心に、どんな音が鳴り響いたのか。僕はまるで現代音楽を聴くように、この句に接することができた。

『黙示』は赤黄男の最後の句集で、きっと坂本さんは赤黄男の抽象性や象徴性の「極み」を読もうとしていたのではないかと考えた。謹んで坂本龍一さんのご冥福を祈ります。

「老残の——無音の鐘を撞き鳴らす 赤黄男」(『黙示』より)

「五浦・岡倉天心巡礼」

鈴木 崇

ある日、台赛区谷中を歩いていると、ちよつとせつという児童公園規模の広場があった。小さな落ち着く場所だと思ひ、園内に入ると、奥に存在感のある六角堂が建っている。

ここは岡倉天心記念公園。天心の旧居跡で、日本美術院が開設された地なのだった。六角堂内には平櫛田中作の「岡倉天心胸像」が安置されている。

安置、と常套句をオートマチックに記してしまつたが、胸像の表情はふてふてしい迫力に満ち、全然安んじていない。多くの天心像やポートレートにも同じように、不遜な、荒ぶつた気配を濃厚に感じる。天心という人物の過剰さは明治人の中でもかなり異色だ。

岡倉天心は文久二年横浜に生まれた。天心は雅号で、本名は覚三。代表作は『茶の本 THE BOOK OF TEA』著作はすべて英文で書かれている。活動は多岐にわたり、高階秀爾曰く「彼は同時に思想家であり、教育者であり、行政官であり、美術史家であり、批評家であり、芸術運動の組織

者であり、美術館の管理者であり、しかもそれらのいずれの枠からもはみ出してしまふ存在であつた。彼の桁違いのスケールが窺える。

国際人であつた天心は、海外でも羽織袴で通した。天心胸像も、ちよつと変わった服装をしている。これは東京美術学校時代に天心が定めた制服で、「美術は奈良朝から学ぶべき」との考えから奈良時代の朝廷で文官が着た服装を復活させたもの。天心はこの制服で馬に乗つて学校へ通つたという。

二〇二二年夏に茨城を旅し、五浦へ立ち寄つた。

五浦は谷中から日本美術院を移転した、天心ゆかりの地である。旧天心邸・六角堂・長屋門は「天心遺跡」として有料公開されている白五浦海岸の岩場を望むこちらの六角堂を模して、公園の六角堂は建てられていたのだ。

春潮の音のひしめく六角堂

星野恒彦

六角堂は、波の浸食で洗われた硬い岩盤



の岬に立つている。六角堂の北と南で地形と地層の様子が異なり、崖面の模様など自然の造形美を観察できる。海に突出する奇岩の正体は炭酸塩コンクリーション、いわば「天然のコンクリート」である。さすが天心、絶好のビューポイントに建てたものだ。

天心はこの海岸で自ら設計した釣船に乗り、釣りを楽しんだ。仕官を断り釣りなどをして隠士で一生を終えたという後漢の人物・嚴子陵に扮した天心の写真が残つており、この姿をもとに制作された田中作の「五浦釣人像」が記念館に展示されていた。奈良朝の制服といい後漢の隠士といい、天心のコスプレ趣味ガチ勢ぶりに気圧される。



上野 「岡倉天心像」平櫛田中

羽音集

谷口摩耶 選



若沖の描きし鶏冠五月間

松戸 綾戸五十枝

花言葉は気まぐれな恋ミモザ咲く
さりさりと抹茶小豆のかき氷

偏頭痛の始まる予感花の雨

声がれの藍の半纏祭かな

柏 高橋 詩

雛罌粟に日にはかなる雨のあと

白濁の湯に浮く菖蒲旅の宿

水際に手持無沙汰の鯉幟

児が追うてたんぼぼの絮飛ばす風

習志野 野村昌代

美容師の缺の音のすずしさよ

夏立つやリトルリーグのヘルメット

若夏や米軍跡の博物館

涼しさのびん付け油匂ふ車輛

半夏生ダム湖の底に村百軒

豊橋 西山三子

カーネーション尺の物差し飴色に

麦の秋搭乗待ちのうたた寝よ

北の地の一面に黄の麦穂かな

春曇阿寒湖の朝静まりぬ
おむすびをほぼぼる子等よ青楓
川風に競うて数多鯉幟

茶庵閑話 62

史丸



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>